

平田篤胤『靈能真柱』における靈魂觀

金本拓士

はじめに

これまで日本人の靈魂觀を、『現代密教』二十一号では、スピリチュアルブームで有名になった江原啓之、そしてかれの靈魂觀のもととなったと考えられる浅野和二郎の靈魂觀を取り上げて考察し、また『現代密教』二十二号においては、浅野和二郎やかれが所属した大本教に見られる靈魂觀のもととみなされる本田親徳を取り上げてかれの靈魂觀を考察した。

前回の論考より、本田の靈魂觀から大本教の出口王仁三郎の靈魂觀が展開し、さらに浅野和二郎のスピリッツユアル学が構築されていたことが、若干ながら確認することができた。そして、本田の著作を読み、かれの思想を探っていくと、どうやら本田の靈魂觀の基盤には、復古神道の大成者の一人である平田篤胤の靈魂觀があるらしいことが分かってきた。

その一例をあげるならば、本田が言うところの、この世界の創造主である「天御中主」「産生神」「直霊」や「和魂」をはじめとする「二霊四魂」の存在。これら用語は、平田篤胤の『古事記』解釈を通した霊魂観からもたらされたものである。

そこで、本論文では、平田篤胤の霊魂観を知るために、かれの代表作である『霊能真柱』を取り上げ、そこから見えてくる日本人の霊魂のあり方について考察していくこととする。

なお、平田篤胤の霊魂に関する研究については、平田研究の第一人者である子安宣邦氏の『平田篤胤の世界』、また吉田真樹氏の『平田篤胤―霊魂のゆくえ』において詳しく論じられているので、ここではこれら先行研究を参照しながら、平田の霊魂観について考えてみたい。

一 平田篤胤の『霊能真柱』執筆動機

平田篤胤（以下平田と略）が『霊能真柱』を執筆する動機は、最初の所に書かれている。

古学を学ぶ者は、まず何よりも第一に大和心を固めなくてはならない。この固めが固くなくては、まことの道を知ることができないということは、わが師本居翁がねんごろに教えたとされたところである。…ところで、その大和心を太く高く固めたく望むときには、何よりも人の死後の霊の行方、落ち着くところを知ることが第一である。

〔日本の名著一五九頁下〕

ここで言うところの「古学」とは、「古道（記紀神話等が指し示す神の道。真の道ともいう。）の学」のことで

ある。これを学ぶためには「大和心」をしつかりと固め（この場合、漢心カウや西洋思想に揺れ動かないという意味^①）なければならぬ。そのためには人の死後、靈の行方を理解しなければならぬとする。

二 平田篤胤が考える世界の成り立ちについて

平田は、『靈能真柱』で靈の行方を定めるため、この世界（日本が中心）がどのように成り立っていったかを初めに説明し、その上で靈がどのように位置付けられているのかを解き明かす。

さて、その靈の行方の落ち着くところを知るには、まず天・地・泉よみの三つの成りはじめ、またその形をくわしく考え、その天・地・泉を天・地・泉たらしめたもうた神の功をよく知り、わが日本国が万国の本の国であり、万事万象が万国にすぐれるわけ、さらにまた、畏れおおいわが天皇が万国の大君であることのまこととのわけを十分知って、かくて、靈の行方ははじめて知りうるものである。〔日本の名著一六〇頁上〕

そこで平田は、まず本居門下の服部中庸②が書いた『三大考』の中で考えられた世界觀「天・地・泉」を取り入れながら、かれ独自の世界觀を説明する。

まず世界の基本構成である「天・地・泉」が、虚空にいる三柱の神々から始まることを、古事記の文を引いて説明する。

古ノ伝ニ曰ク、古天地イマダ生ラザリシ時、天御虚空ニ成リマセル神ノ御名ハ、天之御中主神、次ニ高皇

産霊神、次ニ神皇産霊神、コノ三柱ノ神ハ、並ナ独神成リマシテ御身ヲ隠シタマイキ

三柱とは、「天之御中主神」「高皇産霊神」「神皇産霊神」である。この三神は、いまだ世界が成り立つ以前の虚空の中に存在する。この中「天之御中主神」については、『靈能真柱』では詳しく言及されていないが、平田の後の著作においては、天地創造の根源的神とみなしている。⁽³⁾

「高皇産霊神」「神皇産霊神」の両産霊神について平田は、高皇産霊神は男神、神皇産霊神は女神と考えている。また高皇産霊神は、「われわれの目に見える顕事の面をつかさどり」、神皇産霊神は「目に見えない幽事の面をつかさどる」〔日本の名著一六四頁下〕とする。

つまり、原初は、虚空の中に三柱の神のみが存在したとする。そして高皇産霊神、神皇産霊神の二柱は、「産霊」という言葉が示すように、両神は世界を生み出す元であると解釈する。(図1)

次に平田は、『古事記』の記述を引用して、二柱から世界の根本資糧が生み出されたことを明かす。

古ノ伝ニ曰ク、ココニ大虚空ノ中ニ一ツノ物生リテ、ソノ状貌言イガタク、浮雲ノ根係ル処ナキガゴトクシテ、海月^{くらげ}ナス漂蕩エル時ニ、云々。

この生れる一つの物は、やがて天・地・泉の三つに分かれたものである……この一つの物が虚空に生りはじめたのも、それが分かれて天・地・泉と成って、……また次々の神々が生りましたのも、ことごとくかの二柱の産霊の大神の産霊によって生ったのである。

虚空の中に、二柱の神によって、「一つの物」と名付けられた世界を創る資糧が生み出されるが、これは海月くらげのように虚空を漂っていると考える。(図2)
次にこの「一つの物」が形状を変化させていき、天・地・泉が形成されていく。

かの漂う一つの物の中から葦牙のように萌え上がったものが、しだいに上り、しだいに天となり、またそのあとに残った地となるべきものが、まだ固まらずにあった時、その底に、また一つの物が芽ぐみあらわれてきた。それはやがて泉の国となったものである
〔日本の名著一六九頁下〕

その後、この「一つの物」から「宇麻志葦牙比古遲神」が生まれ、またその神から天の基底となる「天之底立神」が生まれる。さらに「一つの物」から「国之底立神」と「豊斟淳神」が生まれる。そして次々と神々が生み



図 1

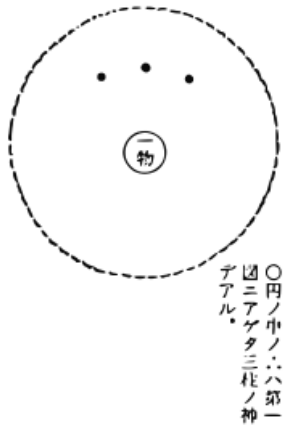


図 2

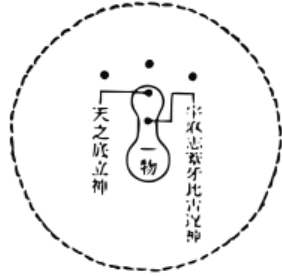


図 3

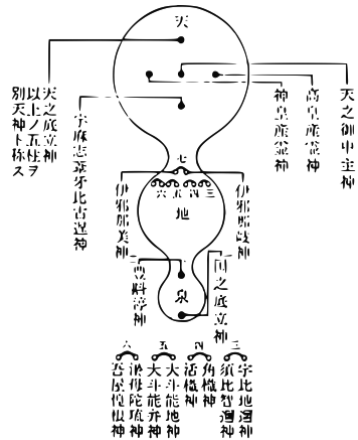


図 4

出されていき、最後に伊邪那岐神と伊邪那美神が生み出され、この最後の二神によって、日本神話で有名な国生みが行われていくのである。(図3、4)

三 伊邪那美神と黄泉の国

天・地・泉の三つの世界に分かれた後、伊邪那岐神と伊邪那美神によって国生みがなされ、伊邪那美神は次々と神々を生み出していく。そして最後に火の神を生んだことによって、伊邪那美神は、黄泉(泉)の国へと隠れることとなった。

『古事記』における伊邪那美神が隠れた黄泉の記述が、日本における最初の「あの世観」であると一般的にいわれている。

ここで描かれる黄泉の世界とは、黄泉の国へ隠れた伊邪那美神を追って、黄泉の世界へ向かった伊邪那岐神が見た世界である。その様子は「一火ヲ燭シテ、入り見マス時ニ、蛆沸膿流ギテ」と描かれ、また黄泉の世界から帰った伊邪那岐神が「吾ハヤ、イナ醜目汚穢キ国ニ至リテ在リケリ。」と語っているように、闇の世界であり、蛆がわいて膿が流れている穢き世界であった。

平田の師である本居宣長も、『古事記』の記述から、死を穢れたものと考え、「死すれば、妻子眷属朋友家財万事をもふりすて、駟れたる此世を永く別れ去て、ふたたび還来ることあたはず、かならずかの穢き予美国に往くとなれば、世の中に、死ぬるほかなしき事はなきものなる……」（玉匱）。「日本人の生死觀一六〇頁」と述べているように、死とは穢れた世界へと行くことであり、ただただ悲しむほかはないという。

確かに、死の不浄感、穢れの感覚は、道ばたに車に轆かれた動物が捨て置かれて徐々に腐乱し朽ち果てていく様子を見るならば、死とは穢れた世界であると思わざるを得ない。現代に比べ、腐爛していく死体を日常的に見る時代に生きていた本居にとって、『古事記』の記述は、リアリティをもって受け止めざるを得なかっただろう。それ故に「死ぬるほかなしき事はなきもの」と言わしめたのである。

だが平田は、黄泉の世界が死の世界と同じ場であると考えない。かれは伊邪那美神が、「黄泉の世界へ隠れる」という『古事記』の記述について次のように解釈する。

さて伊邪那美命が夜見の国に行かれたのは、火を生むひどいありさまを、夫の神が見られることを恥じられ、決して見たまうなといわれたのに、夫の神が見てしまわれたことを、恥ずかしく思われまた恨まれ、夫の神と同じ国土にいることを恥じたまい、自分は下津国に離れて行こうとお考えになったからである。……

「遂に神遊マシキ」とは、上に述べたように、下津国に神遊りまそうとされたものの、途中から還られ、水の神・土の神を生みましたが、やはり恥じ思われる心がやまず、遂に夫の神のもとから下津国に神遊りましたとの意味である。……さて下津国に行かれたのは、その現身のまま行かれたのであって、死なれてその御霊のみが行かれたのではない。

〔日本の名著一八一〜一八三頁〕

伊邪那美神が黄泉の国へ行くのは、火の神を生んだことによるひどいありさま（御有状のいみじき）を夫に見られたことが原因であるとする。そして「神遊」という言葉は、死ぬことではなく、「姿を隠す」ことであると解釈する。

では、黄泉の国自体はどういう場所であるのか。その点については、

ある人問う。夜見の国の質はいかなるものであるか。答え。これまた伝えがないので知りたい。しかし、天にくらべれば、重く濁ったこの大地の底に固まったものであるから、いよいよますます、重く濁ったものであると思われる。……また、伊邪那岐大神が、いな醜目穢き国ぞといわれたことを考えると、たいへんきたないところであると思われる。

〔日本の名著一七二頁〕

と書いているように、太陽を象徴する天高原の国が「清明で、たとえば水晶などのような質」〔日本の名著一六八頁〕とは違い、重く濁った、そして汚れた世界であると考ええる。

その後伊邪那美神は、黄泉の国の主となる。そして、伊邪那岐神は天高原の主となる。

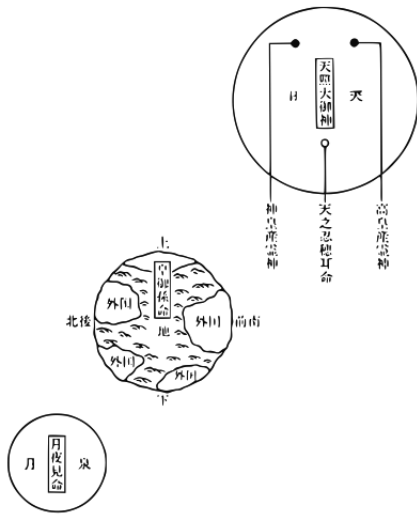


図 5

『古事記』は、この後、黄泉の国から逃げ帰って禊ぎをした伊邪那岐神から様々な神が生み落とされ、その最後に天照大神と須佐之男神を生みだす。そしてこの両神に、天照大神には天高原を治めるように、また須佐之男神にはこの世を治めるように命じるが、須佐之男神は母である伊邪那美神がいる根の国、すなわち黄泉の国へ行きたいと言いつ張った。結局、須佐之男神が、母を慕って黄泉の国に往き、最後にその国を治める月夜見の命となる。ここで、黄泉の国の須佐之男神は、天高原を治める天照大神と相反する存在となる。

その天高原と黄泉の国との違いについては、黄泉の国へ向かった須佐之男神は、かつて伊邪那岐神が黄泉の国から逃げ帰り、川で禊ぎをしたときに生み出された禍津日神を黄泉の国へ連れて行ったため、黄泉の国の穢れを象徴した神となった。つまり黄泉の国とは、禍いをこの世にもたらす禍津日神が住む世界であるとともに、須佐之男神が治める国ゆえに荒魂の世界であるとする。逆に天は世の中の禍いを正す直毘神がいて、天照大神の和魂が存在する世界であると解釈している。

さらに平田は、この黄泉の国については、大国主神が支配していたこの世を天高原から降臨した天孫に譲ったとき、天と地とを結ぶ天の浮橋が無くなり、この世と黄泉の世界が切り離され、天は太陽となり、黄泉は月となったのであると『三大考』に従って解釈している。(図5)

四 顕事（顕明事）と幽事（幽冥事） 人は死んで、どこへ行くのか

平田は黄泉の国は死の国ではない。よって伊邪那美神も死んでいないと考える。かれにとって人が死ぬと黄泉の世界へ行くとは考えたくない事態であった。なぜならば、かれにとつて最大の理解者であり、最愛の妻であった織瀬が、先に亡くなり穢き国である黄泉へ去ることは堪えられないことであつたようである。

それでは、人が死ぬと黄泉の国へ行くのではなく、どこへ行くというのであろうか。

平田は、『古事記』の中の大国主神が天孫に国譲りをした記述に基づき、この世界を顕事と幽事の二つの概念に分け、さらにそこから人の魂の行方を定めていく。

大国主神ニ問イタマワク、云々。对エタマワク、

「云々。コノ葦原中国ハ命ノマニマニ既ニ猷ラン。云々。吾ハ百不足八十隅手ニ隠リテ侍イナン」ト白シタマイキ。

云々。ココニ武甕槌神、云々。大国主神白シタマワク、

「天神ノ命カクシモ慇懃ナルヲ、ナド御言ニ違イマツラン。吾ガ治ラスル顕事ハ天神ノ御子治ラスベシ。吾ハ隠リテ幽事ヲ治ラン」ト報命白シタマイキ。〔日本の名著一〇七頁〕

平田はこの『古事記』の文章を引用し、大国主神が、天孫に国を譲り、自分は「八十隅手に隠れる」と言うのは、「八十隅手は、「何処をそことははっきり指し定めることのない言葉」であるから、「その形を顕世に現わした

まわず、何処にますとも知られず隠れます様を述べた形容の言葉「日本の名著二二二頁」であり、大国主神が國譲りをする際、自分はどこか分らないところに隠れるという意味であると解釈する。そして、大国主神は、「御自身が望まれたとおりに、宮をつくりたまひ、高皇・神皇兩産靈神が、幽事をつかさどれと仰せ付けになったその大詔をかしこみうけたまわりまして、顕明事は皇帝に譲り、その宮に鎮まりまして、今にいたるまで幽冥事をつかさどられるのである」(日本の名著二二三頁)と理解する。

ここで言うところの「顕明事」と「幽冥事」について平田は、師である本居の言葉を引いて説明する。

「皇孫の命が天の下を治められるすべての御業は、この世の人間があらわに行う業であるのに対して、幽冥事とは、あらわに目にも見えず、誰がなすともなく、神のなしたまう業である。この世のあらゆる事は、すべてみな神のなしたまう事ではあるが、これをしばらくこの世の人間のなす事と神のなしたまう業とに分けて、後者を前者に対して神事というのである。今この大国主神が神事をつかさどられるのも、皇朝の政事をひそかに助けられるのであるから、侍ワンヅという表現にこの心がこめられている」(日本の名著二二三頁)

本居が言う「顕明事」とは、「皇孫」すなわち天皇が治められているこの世の生業のことであり、「幽冥事」というのは、現世の人間では見ることができない、神がおこなう業であるとする。よって、この世界から見ると、「幽冥事」とは「神事」のことを指しているのである。そして大国主神は、冥府に隠れ、そこから現世を治めている皇朝を補佐しつづけているのであると解釈する。

さらに平田は本居の説を踏襲しながら、この「顕明事」と「幽冥事」のあり方を人間の生死のあり方に当ては

めていく。

さて顕明事と幽冥事との区別をたらつら思うと、人間もこのように生きて現世にあるうちは顕明事で天皇の民であるが、死ぬと、その魂すなわち神となり、かの幽霊・冥魂などのように、すでに幽冥に帰するのであるから、その冥府をつかさどる大神、つまり大国主神に帰服したてまつり、その御掟にしたがうことになるのである。またこのように冥府にありつつ、この顕明の君・親、また子孫を助け守ること、それは大国主神が隠れましつ世を守りたまうのと同じである。

〔日本の名著 二一四頁〕

平田は、大国主神が幽冥をつかさどり、天皇が現世をつかさどっているとす。この二つの世界の中で、人間は生きている間は天皇の民として生き、死んでからは大国主に帰順してその掟にしたがうことになる。さらに、死んだ魂は、大国主神のように現世に生きている親や子孫を見守る存在となるのである。

それでは、人が死んで行くところの冥府とは、黄泉の国でないならば、どこにあるのか。平田は、人が死んで行くところについて、次のように考える。

では、この国土の人が死んだ後、その魂はどこに行くのかといえ、それは永久にこの国土にいるのである。……この現世にいる人間には、容易には、どこにいると指していうことができたいのである。……では、どういうわけで、さだかに知りえないのかというと、遠い神代に高皇・神皇の両産霊の神たちがお定めになった大詔のままに八十隅手に隠れられた大国主神の治められる冥府に帰属してしまっているからであ

る。……そもその冥府というのは、この国土の外の別のどこかにあるわけではない。この国土の内のごくにでもあるのであるが、ただ幽冥（ほのか）にして現世とは隔たっており目に見ることができないのである。

〔日本の名著二四一〜二四二頁〕

人が死んだ後、魂はどこにも行かずにこの国土（天・地・泉で言えば、地）に永久に留まるとする。つまり、仏教で説くように輪廻して生まれ死にするわけでもない。また、魂はこの国土にとどまるのではあるが、あまりにも幽冥（ほのか）なので現世に住む人間から見ることができないのであるとする。

しかしながら現世から冥府の世界を見ることができないが、平田は、「その冥府からは現世の人しわざはよく見えるのである」と言う。なぜならば、先に述べたように、大国主神が冥府からこの世を守っていくのと同様に冥府の世界から子孫たちを見守っていく存在であるからである。

五 魂の留まるところ

人が死んで魂が大国主神が隠れている冥府の世界へ行くことが説明されたが、その魂たちはどこに留まるのか。平田は次のように説明する。

さて、この現世に生きる人々も世にあるうちはこのようであるが、死んで幽冥に帰すると、その靈魂はすなわち神となり、その靈異（くしび）なることは、そのほどほどにしたがつて、あるいは貴く・賤しく、あるいは善く・悪く、あるいは剛く・よわくとちがいはあるが、中でもすぐれたものは神代の神の靈異さにも

おとらぬはたらきをなし、また事がおこらない前から、その事を人にさとらせるなど神代の神と異なるところがないのである。……では、黄泉に往かないならば、どこにとどまって、このように君親妻子を守るのであろうか。社や祠などを建て祭られた神々はそこに鎮まりますわけであるが、そうではないものは、その墓のほとりに鎮まりますのである。この場合にも、天地とともに永久にそこに鎮まりますことは、神々が永久に社・祠に鎮まりますのと同じである。

〔日本の名著一四四頁〕

人は死んで幽冥に赴き、その魂は神となる。しかし神となってもすべてが貴きものとはならない。その魂の性質によつて善き神にもなれば、程度の悪い神ともなるようである。いずれにせよ死んだ魂は幽冥から現世の子孫たちを見守る存在となるのであるが、その魂がとどまるところは、日本の神々が社や祠に鎮座するように、それぞれ葬られた墓に鎮まるのであると考えている。

六 霊魂の賞罰

これまで平田の霊魂観について、『靈能真柱』から見てきた。その中で、人の魂は冥府に赴き、程度の差あれ神となつてこの世の子孫たちを見守る存在となると説かれいることが確認できた。しかし、そうなると、現世における行いの善悪如何にかかわらず、すべての魂は神となるならば、いくらこの世で悪業を積んでも罰を被らないということになつてしまう。

このことについては、平田は別の著作『日本書記纂疏』の中で次のように言う。

幽冥事を治め給ふ大神は、其を（現世での人の善事悪事を——筆者注）見徹し坐して、現世の報をも賜い、幽冥に入たる靈神の、善悪を糺判ちて、産靈ノ大神の命賜へる性に反ける、罪犯を罰め、其性の率に勉めて、善行ありしは賞み給う。

〔平田篤胤の世界二二頁〕

先に引用したように、人が死んで大国主神の世界へ行き、「大国主神に帰服したてまつり、その御掟にしたがうこと」になるのだから、現世で行った行為については、大国主神がその賞罰を与えるのである。

さらに、平田の立場としては、黄泉の国へ人の魂が行くことはないとしながらも、「ここに畏れはばかるべきこと」がある。それは神の教えを信ぜず神の道をないがしろに思いたてまつる者は、神々がおいはらうことというかの神やらいの理のごとく、黄泉の国においやられると思われぬふしがある。〔日本の名著三三九頁〕と述べて、神への不信心者は、もしかしたら黄泉へ行くかもしれないと考えているようである。

七 まとめとして

以上、『靈能真柱』の記述から、平田の考える靈魂觀を見てきた。かれが靈魂の行方を定めるために、まず如何にこの世界は出来上がってきたのか、その天地創造のあり方から説明をする。その際用いた「天・地・泉」の構図であるが、これは服部中庸の『三大考』によるところが大きい。この『三大考』は、当時日本に輸入され、多くの知識人が影響されてきた西洋学問に影響されながらも、仏教の世界觀でも儒教の世界觀でもない、記紀に説かれていた日本独自の世界觀を構築しようとして書かれたものである。

平田は、服部の『三大考』の考えをもとに、彼自身の世界觀を構築していく。その意図するところは、日本に

おける人間の靈魂の存在を、仏教・儒教・西洋思想によらない、『古事記』によって証明しようとしたのである。『靈能真柱』に説かれるところの靈魂の行方については、師である本居宣長の死んだら暗き黄泉の国へ行く、という考えを否定し、靈魂は永遠にこの国土に住み続けると主張する。つまり、死者の魂は、常に我々と共にこの世界に在り続けるのであると言うのである。それは、日本の神々が常に社や祠に鎮まっているように、死者の靈魂は墓のもとに鎮まっているのだと考える。

この考え方は、果たして平田独自の考え方であったのであろうか。もしかしたらそれは、かれが生きていた時代の日本人一般的な通念であったとも考えられる。

今でも葬儀・法事の際、よく参列者の挨拶の中で、「ほとけも草場の蔭で喜んでいるでしょう。」という発言もよく聞くところである。それは日本人本来の死者観から来るものかもしれない。死者が墓に眠っているという観念は、本来日本人誰もが持っているものであろう。だからこそ、数年前に流行した「千の風」のような歌詞も、日本人にとって新鮮に感じたのかもしれない。

もともと、日本人にとって靈魂とは、平田の言うように神と同じような存在としてとらえていたかもしれない。神はいつでも社や祠に居て、その土地の鎮守となつているのと同じように、死者の魂が墓に鎮まり子孫を見守つているとイメージしてきたのである。そのように考えるならば、日本人の先祖崇拜という宗教観も理解しやすいのではなからうか。

死者の靈魂がこの世と共にあるというのは、果たして昔から日本人がもっている宗教観かどうか判断できない。それでも平田の靈魂の行方についての考え方は、日本人の持っている宗教観からもたらされているように思える。前回の論文において本田親徳の靈魂観について考えてみたが、「帰神・鎮魂」の法は、確かに平田が言うよう

に、死者の靈魂がこの世に存在して、はじめて成り立つ法である。また、江原啓之のスピリチュアルメッセージも、あるいは、恐山のイタコや沖繩のユタも靈魂がこの世と共にあることで成立していることから、平田が考えた靈魂觀は、日本の靈性の一面を示すものであると言えよう。

註

(1) 「外国の説は、仏教のも儒教のも、みな己が心をもって、かならずこうあるはずである推量して定めたつくりごとをのべたものである。その中でも印度の説などは、ただ女子供を欺くだけのような妄説であるから論ずるまでもない。〔日本の名著一六〇頁〕

(2) 服部中庸（一七五七〜一八二四）松坂殿町、通称鷹部屋に住す。紀州藩士。本姓、源。通称、義内。号は楓蔭。水月。箕田水月とも称する。天明5年、宣長に入門。歌の添削や講釈を聴講する。また『三大考』を執筆し、宣長により『古事記伝』巻17の付録として載せられる。（本居宣長記念館HPより）

(3) 「この三神のうち天之御中主神については、のちにその根源性がいっそう強調されるが、『靈能真柱』ではまだそのことはいわれていない。」〔平田篤胤の世界一九九頁〕

〈キーワード〉

古神道 平田篤胤 靈能真柱 靈魂

使用テキスト

〔日本の名著〕責任編集 相良亨 『日本の名著24 平田篤胤』中公バックス 中央公論社 1997年9月10日再版

〔平田篤胤の世界〕子安宣邦 『平田篤胤の世界』株式会社ペリかん社 2009年新装版

〔日本人の生死觀〕宗教思想研究会編 『日本人の生死觀』大蔵出版 1991年

参考文献

吉田真樹 『再発見 日本の哲学 平田篤胤―靈魂のゆくえ』講談社 2009年

日本思想体系1 『古事記』岩波書店 1982年
日本思想体系50 『平田篤胤 伴信友 大國隆正』岩波書店

現代密教 第23号

版 田原嗣郎 1975年

『人物叢書

平田篤胤』吉川弘文館

平成8年6月新装